

地域スポーツクラブにおけるスポーツ活動が 社会的要因を通じて生きがいを与える影響の日加間比較

—スポーツによる生きがい溢れるまちづくりを目指して—

伊藤 央二*

河野 慎太郎** 岡安 功*** Gordon J. Walker****

抄 録

生きがいは日本文化に特有なウェルビーイング概念として学術的関心を集めてきた。スポーツと生きがい感の関係性を示す先行文献はあるものの、なぜこの関係性が存在するのかを説明するメカニズムは未だに解明されていない。本研究は中高年（35歳以上）において社会的要因、特にソーシャルキャピタル・地域愛着・ソーシャルサポートに着目し、スポーツと生きがい感の関係性の媒介メカニズムの解明することを目的とした。スポーツ関連要因に関しては、社会的要因との関係が予想されるスポーツクラブへの所属にも着目した。さらに、過去の日本における生きがい研究結果を他文化へ一般化するため、日本人とヨーロッパ系カナダ人を対象とした文化比較も行った。

データ収集にはオンライン調査を用いた。スポーツクラブ所属・非所属と年齢層が均一に抽出されるようにデータを回収し、最終サンプルは日本人 206 名とカナダ人 196 名（計 406 名）となった。主なデータ分析方法として *partial least squares structural equation modeling* (PLS-SEM) を用いた。モデルの検証前にまず、測定モデルの日加間での不変性を検討するために、*measurement invariance of composite models* (MICOM; Henseler et al., 2016) を行った。部分的な不変性を確立したのち、PLS アルゴリズムとブートストラップ法を用いて各文化における測定モデルと構造式モデルの検証を行った。構造式においてスポーツクラブ所属は社会的変数または生きがい感変数と有意な相関を示さなかったものの、スポーツ参加頻度とスポーツ経験の価値規定は有意な影響を及ぼした。さらに、社会的変数は特にカナダ人において生きがい感に正の影響を与えることが認められた。最後に多母集団同時分析を行い、モデル内の各パスが日加間で有意に異なるかを検証した。本研究結果より、文化差と日本社会の特異性に基づいたスポーツクラブ所属と他変数の関係性の欠如、また日本人における社会的要因に媒介されたスポーツと生きがい感の関係性の少なさが示唆された。

キーワード：生きがい、スポーツ、スポーツクラブ、中高年、文化比較

* 和歌山大学観光学部 〒640-8510 和歌山県和歌山市栄谷 930

** Department of Public Health and Recreation Professions, Southern Illinois University Carbondale
475 Clocktower Dr., Pulliam 312, Carbondale IL 62901, USA

*** 広島経済大学経済学部 〒731-0192 広島県広島市安佐南区祇園 5-37-1

**** Faculty of Kinesiology, Sport and Recreation, University of Alberta 2-130T University Hall, University of Alberta, Edmonton, Alberta Canada T6G 2H9

A Cross-Cultural Study between Japan and Canada of Sport's Effects on *Ikigai* through Social Factors in the Sport Club Context

—Development of Community with *Ikigai* through Sports—

Eiji Ito *

Shintaro Kono**

Isao Okayasu***

Gordon J. Walker ****

Abstract

Ikigai has attracted academic attention as a well-being concept unique to Japanese culture. Although the literature suggests a possible relationship between sports and *ikigai* feelings, it remains short of an explanation of why this relationship may exist. The purpose of this study, therefore, is to clarify a mediating mechanism between sports and *ikigai* feelings among middle-aged and older adults, focusing on three social factors: social capital, community attachment, and social support. In terms of sports variables, we included sports club membership because of its potential relevance for the social factors. In addition, we conducted a cross-cultural comparison between Japanese and Euro-Canadians to generalize findings from past *ikigai* studies in Japan.

We employed an online survey for data collection. We sampled online survey panelists such that sports club members and non-members, as well as different age groups, would be almost equally represented. The final sample consisted of 206 Japanese and 196 Canadians (a total of 406). We also adopted partial least squares structural equation modeling (PLS-SEM) as our main analysis method. Before testing our model, we first examined measurement invariance between Japanese and Canadian samples by performing measurement invariance of composite models (MICOM; Henseler et al., 2016). After establishing partial invariance, we conducted the PLS algorithm and bootstrap procedure to evaluate measurement and structural models within each cultural group. In terms of structural model findings, although sports club membership did not exhibit any significant relationships with the social or *ikigai* feeling variables, sports participation and sports experience valuation did so. Moreover, the social variables exhibited robust positive effects on *ikigai* feelings especially among Canadians. Lastly, we performed multi-group analysis to inspect whether any paths within our model differed significantly across the two cultural groups. We discuss the absence of the relationships between sports club membership and the endogenous variables, and the lack of indirect effects of sports on *ikigai* feelings via the social factors in light of cultural differences and Japanese society's uniqueness.

Key Words : *ikigai*, sports, sports club, middle-aged and older adults, cross-cultural comparison

* Faculty of Tourism, Wakayama University 930 Sakaedani, Wakayama City, Wakayama, Japan, 640-8510

** Department of Public Health and Recreation Professions, Southern Illinois University Carbondale 475 Clocktower Dr., Pulliam 312, Carbondale IL 62901, USA

*** Faculty of Economics, Hiroshima University of Economics 5-37-1 Gion, Asaminamiku, Hiroshima City, Hiroshima, Japan, 731-0192

**** Faculty of Kinesiology, Sport and Recreation, University of Alberta 2-130T University Hall, University of Alberta, Edmonton, Alberta Canada T6G 2H9

1. はじめに

生きがいは日本文化に特有なウェルビーイングとして学術的に注目されてきた (e.g., 熊野, 2012)。「生きがい」という言葉は、人生における目的感や存在意義感といった主にポジティブな認知的状態 (生きがい感) とその源泉となる活動や物、人、場所など (生きがいの源泉) を表すという2面性を持つことが指摘されている (神谷, 2004)。生きがい感については、Kumano (in press) が欧米のポジティブ心理学で近年盛んに研究されているエウダイモニア的ウェルビーイングに近いことを実証的に示している。この種のウェルビーイングは、従来の快感情に重きを置いた快楽的ウェルビーイングに比べ、より個人的価値観や社会的規範に左右されることが指摘されている (Huta & Waterman, 2014)。生きがいの源泉について、仕事や家族といった個人の裁量を超える要素以外で頻繁に報告されてきたのがスポーツを含めた趣味である (e.g., 伊藤ら, 2016; 芹沢ら, 2006)。

しかし、スポーツと生きがいの関連性に焦点を当てた研究はこれまで体系的に行われていない。例外として、伊藤ら (2016) は大学生においてスポーツの様々な側面 (e.g., 参加頻度、満足度) が、生きがい感に正の影響を与えることを明らかにしている。さらに、伊藤らのデータはこの効果が特にスポーツ系部活動所属者の中で強いことを示唆している。社会学的な生きがい研究によると、生きがい感は集団への帰属やソーシャルサポートによって向上すると指摘されてきており (e.g., 青木, 2015; 高橋&和田, 2001)、上記のスポーツと生きがい感の関連性のグループ差が社会的要因によって説明できる可能性があることが推察される。

2. 目的

本研究の目的は、社会的要因、特にソーシャルキャピタル・地域愛着・ソーシャルサポートに着目し、スポーツと生きがい感の関係性の媒介メカニズムの解明することである。具体的な社会的要因として、ソーシャルキャピタル (Helliwell et al., 2016)、地域愛着 (Rollero & De Piccoli, 2010)、そしてソーシャルサポート (青木, 2015) の3つを選出した。さらに、伊藤ら (2016) の日本人大学生における研究結果の一般化可能性を吟味するため、中高年 (35歳以上) の日本人とヨーロッパ系カナダ人を対象とした文化比較研究を実施することにした。

3. 方法

3. 1. データ収集・調査対象者

年齢層と国籍の異なる母集団からデータを効率的に回収するためにオンライン調査を用いた。具体的には、オンライン調査会社が保持するパネルリストから35歳以上であるパネル登録者に招待メールを送った。スクリーニング質問で日本人またはヨーロッパ系カナダ人であると回答したパネルを、年齢層とスポーツクラブへの所属・非所属のバランスが均等になるように抽出した。サンプル数は国別とスポーツクラブ所属有無の各4グループで、主な分析法である partial least squares (PLS) 構造方程式モデリングにおいて十分な統計力を担保できるよう努めた (有意値5%、最小 R^2 .25、最大パス数10; Hair et al., 2017)。最終サンプル数は日本人206名・カナダ人196名 (計402名) となり、スポーツクラブへの所属有無と男女比は共に日加間でほぼ50%であった。年齢層は両国で35歳から74歳までを10歳毎に区切った4グループと75歳以上の計5グループのそれぞれが約20%を占めた。

3. 2. 調査項目

生きがい感は妥当性と信頼性が確認されている Kono (2017) の18項目 (3因子×6項目) から成る尺度を用いた。本項目の生きがい感の3要因は、①価値ある「経験」に基づく生活の価値と活気、②自分らしくあれ誠実な心遣いを感じる対人関係の「居場所」、③過去・現在・将来の繋がりを感じる人生の「方向性」、である。さらに、Kono (2017) の「経験」が「楽しみ」「頑張り」「刺激」「癒し」の4価値から規定されるという指摘に基づき、これらの価値規定をスポーツ経験の文脈で尋ねた (各価値1項目、計4項目)。スポーツ参加頻度は、伊藤ら (2016) が用いた4項目 (エクササイズ、スポーツ活動、野外活動、スポーツイベント) を採用した。スポーツクラブ所属者に関しては、直近1か月でクラブに通った回数、クラブで過ごした合計時間、会員年数、クラブ会員の友人数、そしてクラブで行った活動数を自由記述で尋ねた。

ソーシャルキャピタルに関しても妥当性と信頼性が報告されている Williams (2006) の尺度から、社会属性の似通った集団内での繋がり **Bonding** と社会属性をまたぐ繋がり **Bridging** を各5項目で測定した。地域愛着は Kyle et al. (2005) の3因子 (地域アイデンティティ・地域依存・社会的繋がり) から成る尺度のうち、10項目を採用した。ソーシャルサポートに関しては、岩佐ら (2007) が和訳し、妥当性と信

頼性を検証した尺度から10項目を援用し、「家族」・「大切な人」・「友人」の3因子を7点法のリッカート尺度で測定した。その他の尺度は、5点法のリッカート尺度で測定した。

3. 3. データ分析

初めに、複数の下位因子の存在が提唱されている変数に対して探索的因子分析 (EFA) を行い、以降の分析で下位因子を反映する必要性があるか吟味した。続いて、主要変数と制御変数に対して記述統計と2変量相関を求めた。その後、PLS 構造方程式モデリングにおける測定不変性の検証方法である measurement invariance of composite models (MICOM: Henseler et al., 2016) を行い、日加間での測定モデルの不変性を統計的に確認した。最後に、多母集団同時分析 (MGA) を行い、構造式に関して日加間で有意差があるか検証した。

4. 結果及び考察

4. 1. EFA による複数下位因子の存在の確認

先行研究が下位因子の存在を示しているソーシャルキャピタル・地域愛着・ソーシャルサポート・生きがい感について、それぞれ EFA を行った。主因子法、固有値1、さらに直接オブリミン回転 ($\Delta=0$) を用いた。紙面の制限から詳細な因子負荷量などは省くが、ソーシャルキャピタルと地域愛着においては1因子解が支持された。ソーシャルサポートに関しては、カナダ人では「家族」・「大切な人」・「友人」の3因子が検出されたが、日本人では第1因子が「家族」と「大切な人」の項目が負荷し、2因子解となった。生きがい感については、日加共に第1因子が「経験」と「方向性」の項目に負荷し、第2因子が「居場所」項目に負

荷する2因子解が支持された。さらに、3項目が日本人サンプルで二重負荷の傾向を見せたため以下の分析から除外した。

4. 2. 主要・制御変数における記述統計と2変量相関

主要・制御変数における記述統計と2変量相関係数を国別で表1に示した。主要変数は有意な正の相関を示しており、主に効果量中 ($r \geq .30$) または大 ($r \geq .50$) を示した (Cohen, 1988)。制御変数の中では、性別、年齢層、主要変数が効果量小 ($r \geq .10$) ながらもいくつかの有意な相関を示し、PLS 構造方程式モデリングに組み込む必要性を示唆する結果となった。

4. 3. MICOM

上記の EFA と2変量相関の結果を基に、統計ソフトウェアの SmartPLS 3 にて図1のモデル (下段) を作成した。日加間で測定モデルの不変性を検証するため Henseler et al. (2016) が提唱した MICOM を行った。各国のデータで同一の測定項目・項目数、データ処理、アルゴリズムを使用しており、第1段階の配置不変性 (configural invariance) は担保された。第2段階の合成不変性 (compositional invariance) に関しては、日加間で有意値 .05 (片側) と5,000の再抽出サンプルに基づいた並び替え法 (permutation) を行った (表2)。各合成変数の日加間の相関を表す c が5,000回の並べ替え法によって作られた c 分布の下限5%を上回ったためこの段階での不変性が支持された。最後に、合成変数の平均と分散の不変性については同様の並び替え法を有意値 .05 (両側) で行った。表2の通り、スポーツ価値規定を除く全ての平均値の差が日加間で有意であった。分散の対数の差に関しては、スポーツ参加頻度と家族・大切な人サポート以外で有

表 1. 主要変数における記述統計と2変量相関

	日本人		ヨーロッパ系カナダ人		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
	M	SD	M	SD											
1. スポーツクラブ所属	---	---	---	---	---	.02	-.03	.59**	.53**	.28**	.22**	.11	.31**	.32**	.14
2. 性別 (男=0, 女=1)	---	---	---	---	.00	---	.03	-.03	-.10	-.04	.01	.04	.11	.02	.08
3. 年齢層	---	---	---	---	.00	.00	---	-.22**	-.12	.07	.09	-.01	.15*	.10	.06
4. スポーツ参加頻度	1.94	0.875	2.58	0.932	.58**	-.15*	.08	---	.64**	.38**	.33**	.23**	.32**	.44**	.19**
5. スポーツ価値規定	2.84	1.133	3.00	1.188	.57**	-.08	.05	.58**	---	.36**	.37**	.26**	.34**	.43**	.23**
6. ソーシャルキャピタル	2.67	0.866	3.23	0.946	.27**	.01	.04	.36**	.40**	---	.76**	.54**	.62**	.52**	.39**
7. 地域密着	2.95	0.903	3.39	0.867	.30**	-.03	.20**	.39**	.42**	.78**	---	.56**	.55**	.60**	.41**
8. 家族・大切な人サポート	4.98	1.397	5.51	1.211	.18*	.17*	.22**	.23**	.26**	.47**	.50**	---	.58**	.60**	.55**
9. 友人サポート	4.40	1.443	5.31	1.400	.22**	.16*	.04	.26**	.34**	.59**	.48**	.72**	---	.64**	.51**
10. 「経験」・「方向性」	3.16	0.798	3.64	0.820	.28**	.06	.15*	.30**	.39**	.42**	.43**	.46**	.52**	---	.62**
11. 「居場所」	3.23	0.741	3.96	0.669	.24**	.18**	.20**	.25**	.34**	.43**	.39**	.48**	.52**	.76**	---

相関係数マトリックスの左下側の数値は日本人の、右上側の数値はヨーロッパ系カナダ人のものである。

* $p < .05$, ** $p < .01$

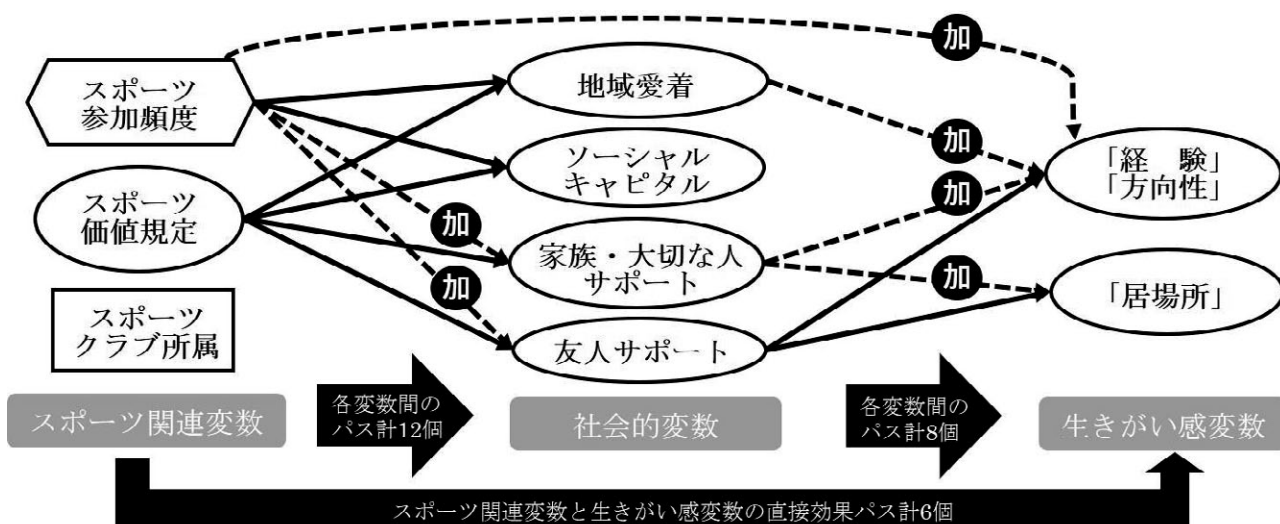


図1. PLS構造方程式モデリングの理論モデル（下段）と分析結果（上段）

意差は認められなかった。全体として部分的不変性が確認されたため、続けて日加比較 (MGA) を行った。

4. 4. PLS 構造方程式モデリングと MGA

PLS アルゴリズムとブートストラップ法 (再抽出 5,000 回、有意値 .05、BCa 法) を行い、日加のそれぞれにおいて測定・構造モデルが Hair et al. (2017) が提唱した基準を満たすか検討した。全ての分析で性別と年齢層を制御変数として用いた。紙面の制限上詳細は省くが、反映法測定モデル (図 1 楕円) においては、①因子負荷量が .70 以上、②平均分散抽出 (AVE) が .50 以上、③ α 信頼度係数が .70 以上、④Heterotrait Monotrait 比が .85 以下であることを確認した。形成法測定モデル (図 1 六角形) に関しては、①最大分散拡大係数 (VIF) が 5 未満で、かつ②ブートストラップ法による重みが有意であるか、または有意でない項目の因子負荷量が .50 以上であることを確認した。

構造モデルについては、VIF が 5 未満であることを確認した。各パスの係数・有意性・効果量、そして R^2 を表 3 に記載した。また、図 1 の上段には有意なパス (実線は両国・点線はカナダのみ) を示した。スポー

ツ関連変数と社会的変数の関係性に関して、スポーツクラブ所属からのパスはどれも有意ではなかった。その他のスポーツ関連変数に関して、スポーツ参加頻度のソーシャルサポート両因子へのパスが日本人で有意でなかったのを除き、全て正の有意なパスを示した。スポーツ関連変数の生きがい感への直接効果については、カナダ人においてスポーツ参加頻度が「経験」・「方向性」に正の相関を示したのを除き、有意差は認められなかった。社会的変数と生きがい感の関係性においては、ソーシャルキャピタルは有意なパスを持たず、地域愛着はカナダ人で「経験」・「方向性」に対してのみ有意な正の効果を示した。家族・大切な人サポートはカナダ人で生きがい感両因子に有意な正の影響を及ぼし、友人サポートは両国にて生きがい感両因子に有意な正の影響を与えていた。効果量については、家族・大切な人サポートが「居場所」に対して効果量中 ($f^2 \geq .15$) を示したのを除き、全ての有意なパスが効果量小 ($f^2 \geq .02$) であった (Hair et al., 2017)。また、上記のブートストラップ法では間接効果の有意性も検証したが、カナダ人においてスポーツ参加頻度が地域愛着を通じて「経験」・「方向性」に影響したのとスポ

表 2. MICOM による測定モデル不変性検定結果

	Original	5% c-		Mean	95% permutation		Variance	95% permutation	
	c-value	value	p	difference	intervals	p	difference	Intervals	p
スポーツ参加頻度	.97737	.87728	.709	0.767	[-0.166; 0.163]	.000	0.219	[-0.194; 0.190]	.029
スポーツ価値規定	.99998	.99990	.698	0.143	[-0.167; 0.167]	.081	0.095	[-0.178; 0.172]	.190
ソーシャルキャピタル	.99950	.99930	.128	0.622	[-0.165; 0.164]	.000	0.161	[-0.213; 0.213]	.111
地域愛着	.99984	.99961	.463	0.484	[-0.162; 0.170]	.000	-0.085	[-0.232; 0.232]	.276
家族・大切な人サポート	.99962	.99828	.393	0.421	[-0.171; 0.164]	.000	-0.290	[-0.256; 0.262]	.029
友人サポート	.99992	.99983	.249	0.614	[-0.163; 0.163]	.000	-0.060	[-0.235; 0.236]	.343
「経験」・「方向性」	.99998	.99981	.970	0.570	[-0.162; 0.166]	.000	0.056	[-0.228; 0.238]	.349
「居場所」	.99959	.99930	.224	0.921	[-0.163; 0.163]	.000	-0.206	[-0.240; 0.245]	.079

一つ価値規定がソーシャルサポート下位因子を通じて生きがい感下位因子に影響した以外は、全て有意ではなかった。さらに、MGA (ブートストラップ法再抽出 3,000 回、有意値 .05、BCa 法) を行い、各パス係数の日加間での差が統計的に有意であるかを検証した。スポーツ参加頻度の「経験」・「方向性」への直接効果と、家族・大切な人サポートの「居場所」への効果が日本人よりカナダ人において有意に大きかった (表 3 太字)。

最後に、上記の PLS 分析においてスポーツクラブ所属者に絞り、スポーツクラブ所属のダミー変数をより詳細なクラブ参加傾向変数 (直近 1 か月でクラブに行った回数・クラブで過ごした時間数・クラブでの活動数、会員年数、クラブ会員の友人数) に差し替えたが、どの社会的要因または生きがい感変数に関しても有意なパスは見つからなかった。

表 3. PLS 構造式モデルと MGA 結果

内生変数	予測変数	パス係数	効果量 (f^2)	R^2
「経験」・ 「方向性」	スポーツ参加頻度	.00/.18*	0.00/0.04	.36/.59
	スポーツ価値規定	.17/.09	0.02/0.01	
	スポーツクラブ所属	.06/.04	0.00/0.00	
	ソーシャルキャピタル	.02/-.14	0.00/0.02	
	地域愛着	.12/.29***	0.01/0.08	
	家族・大切な人サポート	.10/.28***	0.01/0.11	
	友人サポート	.31*/.28**	0.06/0.09	
「居場所」	スポーツ参加頻度	.01/-.00	0.00/0.00	.37/.35
	スポーツ価値規定	.15/.04	0.02/0.00	
	スポーツクラブ所属	.03/.01	0.00/0.00	
	ソーシャルキャピタル	.14/-.04	0.01/0.00	
	地域愛着	-.01/.08	0.00/0.00	
	家族・大切な人サポート	.13/.41***	0.01/0.15	
	友人サポート	.26*/.23*	0.04/0.04	
ソーシャル キャピタル	スポーツ参加頻度	.21*/.24**	0.03/0.04	.20/.16
	スポーツ価値規定	.30***/.20*	0.06/0.03	
	スポーツクラブ所属	-.01/.05	0.00/0.00	
地域愛着	スポーツ参加頻度	.21**/.22**	0.03/0.03	.24/.16
	スポーツ価値規定	.28***/.29***	0.06/0.06	
	スポーツクラブ所属	.02/-.05	0.00/0.00	
家族・大切な 人サポート	スポーツ参加頻度	.15/.21*	0.02/0.03	.16/.08
	スポーツ価値規定	.19*/.22**	0.02/0.03	
	スポーツクラブ所属	-.01/-.14	0.00/0.01	
友人 サポート	スポーツ参加頻度	.15/.21**	0.01/0.03	.17/.19
	スポーツ価値規定	.28**/.21*	0.06/0.03	
	スポーツクラブ所属	-.02/.08	0.00/0.00	

パス係数は全て標準化されている。左側の数値が日本人サンプルのものである。太字は MGA による有意な文化差を示す。* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

5. まとめ

本研究の目的は、社会的要因、特にソーシャルキャピタル・地域愛着・ソーシャルサポートに着目し、スポーツと生きがい感の関係性の媒介メカニズムの解明することであった。また、これらの関係性において日

加間で差があるかを比較することも目的とした。2 変量相関結果によると、スポーツクラブ所属を含むスポーツ関連変数と社会的変数さらに生きがい感変数の間に中程度の正の相関が見られた。社会的変数と生きがい感変数の間にはより強い正の相関があった。これらはスポーツによる参加者の生きがい感向上 (伊藤ら, 2016; 芹沢ら, 2006)、さらに生きがいに溢れる地域づくりを支持する結果である。

しかし、PLS 構造方程式モデリングによって説明変数間の重複する効果を制御すると、異なる様相が明らかになった。まず、スポーツ変数の効果を同時に分析すると、日加間共にスポーツクラブ所属の効果が有意でなくなった。これはスポーツ参加頻度や価値規定が生きがい感や社会的要因に対して、より直近の予測因子であり、スポーツクラブ所属は他のスポーツ変数の予測因子であることが示唆された。つまり、本研究で用いた 3 つのスポーツ変数の中にさらに媒介関係がある可能性が窺える。この結果は、本研究が地域スポーツクラブ一般を調査したことも原因の 1 つとして考えられる。例えば、総合型地域スポーツクラブは一般スポーツクラブに比べ、メンバー内でより強い繋がりがあっても知れない。そうであれば、社会的要因については生きがい感への影響も容易に予測できる。

次に、スポーツ参加頻度と価値規定は、ほぼ同様の効果を社会的変数のそれぞれに日加間で示した。モデルの生きがい感変数に関する説明力としては、「経験」・「方向性」においてカナダ人の間でより高い説明力を示した。この原因としては、スポーツ参加頻度と地域愛着、そして家族・大切な人サポートの効果がカナダ人のみで有意であったことが挙げられる。スポーツ参加頻度と「経験」の関係性の欠如は、日本社会一般におけるスポーツの重要性の認識の欠如によるかもしれない。日本においてスポーツが人生を豊かにするという認識が広まれば、スポーツに溢れる人生が価値あるものとみなされ、「経験」に繋がるだろう。「方向性」に関しては、日本人の間でスポーツ活動を長期に渡って行うシリアスレジャー (Stebbins, 2015) 参加者が少ないことに由来するかも知れない。長期の参加はスポーツ領域の中で過去の貴重な体験や将来の目標を得ることに繋がり、「方向性」を育む。日本人における地域愛着と「経験」・「方向性」の関係性の欠如は、日本社会における都市化とコミュニティ意識の希薄化による可能性がある。一方、家族・大切な人サポートが日本人の「経験」・「方向性」に影響しなかったのは、日本という集合主義的な文化において近しい間柄のサポートが当たり前とみ

なされ、人生の価値評価の意識に上らないためかもしれない (Markus & Kitayama, 2010)。同様の文化的説明は日本人における家族・大切な人サポートの「居場所」への効果の欠如にも当てはまる可能性がある。

上記の文化差を踏まえた上で、日本人における社会的変数と生きがい感変数間の直接効果の少なさと社会的変数を通じたスポーツ変数の生きがい感への間接効果の欠如は注目に値する。他の社会的要因や社会的要因以外の変数に着目した将来のスポーツ・生きがい研究が必要であると言える。最後に本研究ではスポーツ・社会的要因・生きがい感に関する理論モデルの日加間での測定普遍性も確認した。これは今後の文化比較研究を推進する上での貴重な資料となるだろう。

【参考文献】

- 青木邦男 (2015) 在宅高齢者の性格特性, 生きがい感関連要因及び生きがい感の関連性. 山口県立大学学術情報, 8 : 7-17.
- Cohen, J. (1988) *Statistical power analysis for the behavioral sciences* (2nd ed.). Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Hair, J. F. Jr., Hult, G. T. M., Ringle, C. M., & Sarstedt, M. (2017) *A primer on partial least squares structural equation modeling (PLS-SEM)* (2nd ed.). Thousand Oaks, CA: Sage.
- Helliwell, J., Layard, R., & Sachs, J. (2016) *World happiness report 2016* (Vol. 1). http://worldhappiness.report/wp-content/uploads/sites/2/2016/03/HR-V1_web.pdf
- Henseler, J., Ringle, C. N., & Sarstedt, M. (2016) Testing measurement invariance of composites using partial least squares. *International Marketing Review*, 33 (3) : 405-431.
- Huta, V., & Waterman, A. S. (2014) Eudaimonia and its distinction from hedonia: Developing a classification and terminology for understanding conceptual and operational definitions. *Journal of Happiness Studies*, 15 : 1425-1456.
- 伊藤央二・河野慎太郎・Walker, G. J. (2016) スポーツ活動が日本人青年後期の生きがいに及ぼす影響についての理論化研究: 構造方程式モデリングによるグラウンデッド・セオリーのさらなる検証. 2016年度笹川スポーツ財団研究助成 : 204-213.
- 岩佐一・権藤恭之・増井幸恵・稲垣宏樹・河合千恵子・大塚理加・鈴木高雄 (2006) 日本語版「ソーシャル・サポート尺度」の信頼性ならびに妥当性: 中高年者を対象とした検討. *厚生指標*, 54(6) : 26-33.
- 神谷美恵子 (2004) *生きがいについて: 神谷美恵子コレクション*. 東京, 日本: みすず書房.
- Keppel, G., & Wickens, T. D. (2004) *Design and analysis: A researcher's handbook* (4th ed.). Upper Saddle River, NJ: Pearson Prentice Hall.
- Kono, S. (2017) *Theorizing linkages between ikigai (life worthiness) and leisure among Japanese university students*. University of Alberta, Edmonton, Canada.
- 熊野道子 (2012) *生きがい形成の心理学*. 東京, 日本: 風間書房.
- Kumano, M. (in press) On the concept of well-being in Japan: Feeling shiawase as hedonic well-being and feeling ikigai as eudaimonic well-being. *Applied Research in Quality of Life*. Kyle, G., Graefe, A., & Manning, R. (2005) Testing the dimensionality of place attachment in recreational settings. *Environment and Behavior*, 37(2): 153-177.
- Markus, H., R., & Kitayama, S. (2010) Cultures and selves: A cycle of mutual construction. *Perspectives on Psychological Science*, 5 (4): 420-430.
- Rolleo, D., & De Piccoli, N. (2010) Does place attachment affect social well-being? *European Review of Applied Psychology*, 60(4): 233-238.
- 芹沢幹雄・大石哲夫・松井恒二 (2006) 高齢社会における生きがいとしてのスポーツに関する調査研究: 静岡市におけるグラウンド・ゴルフ愛好者をケースとして. *経営と情報: 静岡県立大学・経営情報学部学報*, 19(1) : 19-35.
- Stebbins, R. A. (2015) *Leisure and positive psychology: Linking activities with positiveness*. New York: Palgrave Macmillan.
- 高橋勇悦・和田修一編 (2001) *生きがいの社会学: 高齢社会における幸福とは何か*. 東京, 日本: 弘文堂.
- Williams, D. (2006) On and off the 'Net': Scales for social capital in an online era. *Journal of Computer-Mediated Communication*, 11 : 593-628.

この研究は笹川スポーツ研究助成を受けて実施したものです。